
研究ノート

**最近の中国の農水産物の生産と消費
－中国農業地理研究序説－**

松田 隆典

The trend of production and consumption of agricultural and fishery products in China – An introduction to Chinese agricultural geographical studies –**Takanori MATSUDA**

Department of Education, Shiga University

This paper aims to clarify the trend of agricultural and fishery products in China based on some recent volumes of the Chinese Statistical Yearbook. The subjects of this paper are rice, wheat and corn as the world's three major grains, tea and cotton as typical industrial crops, and fishery products as well as hogs breed for livestock as a typical Chinese animal meat. As Chinese economy has developed, the supply and demand of agricultural and fishery products has changed.

The production of corn has increased. It is not in use as food or feed, but as an industrial grain used in things such as starch materials and ethanol fuels. China must import a lot of corn. While the production of wheat as a typical food in northern China has decreased, wheat as a feed grain has increased greatly. The production of rice has increased, especially because the Japonica rice has increased rapidly in three northeastern provinces.

The demand for cotton has increased as Chinese economy has developed, though its production has not increased. The production area has been moved from the North China Plain to the Xinjiang-Uygur Autonomous Region in accordance with the Western Development Project. The production of tea as a Chinese traditional commercial crop has increased rapidly. It is said that the consumption of tea symbolizes Chinese citizens growing rich.

Pork is the most popular food stuff in China, and hogs are raised in almost all of the humid areas in China, but its production has not increased because economic growth promotes diversification of diet. On the contrary, fishery products have increased rapidly, caused by the farming of freshwater fish in the basins of the Yangtze River and the Huai River, as well as along the sea coast.

Keywords: China, three major grains, cotton, tea, hog, fish

1. はじめに

中国の急速な経済成長とともに、中国の経済地理を理解する必要が高まってきた。世界総人口の19%を占める中国の食糧問題とそれを支える農水産物の生産状況について考察することは重要な課題である。食糧以外の工芸作物についても、中国の工業化の進展を考えると対象とせざるをえない。

筆者は遅ればせながら2006年以降の授業¹⁾の中で、2004年、2008年、2011年、2014年の4年次の中国の省・自治区・特別市別の「中国統計年鑑」などの統計を用いて、中国経済地理の教材を作成してきた。教科書や地図帳に掲載されている20世紀までの主題図などでは、もはや対応できないレベルに至っているからである。

中国の農業を講義の中で取り扱うもう一つの動機は、中国人留学生の存在である。滋賀大学大学院でも留学生の占める割合が21世紀以降高くなってきた。非常勤の関西大学大学院の受講生も中国人留学生が少なくない。2016年度の受講生を例にとると、春・秋の2つの講義を合わせて12人中11人までが中国人留学生であった。

出身地も富裕層が多い臨海部のほか、10年前には多くなかった地方の出身者がいることが特色である²⁾。中国の食生活が地域的に多様であることを仮想するためには十分な数であった。中国全体の動向に加えて、農水産物の生産の地域性とその変化について分析することが目的である。

本稿では、中国の農水産物の最近10年間の変化について分析し、中国の経済成長の一端を明らかにしたい。取り扱う農産物は3大穀物である米・小麦・トウモロコシと中国の代表的な工芸作物である綿花と茶、たんばく源として豚と水産物である。

2. トウモロコシ—食糧・飼料から工業原料へ

張馨元(2014)はその著書の冒頭部分で、「世界最大の農業国である中国において、2012年に最も生産規模が大きい農産物がコメからトウモロコシに変わった」と指摘している³⁾。表1によると、三大穀物のうちトウモロコシの生産は2004年の13,012万tから2014年に21,565万tに急増している。後述する豚の生産高は47,290万頭から2014年の46,583万頭と増加していないことから、生産の急増はもはや飼料用ではなく、工業用の需要増によることは明らかである。

FAOの統計によると、2003年に中国はトウモロコシ1,640万tを輸出し、アメリカ合衆国に次ぐ輸出国であっ

たが、2010年に621万tの輸入に転じている。2010年に17,754万tの生産量であるから、2010年代の引き続きの生産の急増はトウモロコシの輸入と豚肉価格の高騰を抑えることに貢献している。

中国は1984年にトウモロコシの国内需要を満たし、輸出に転じた。食糧需要としては1980年代半ばに減少に転じたが、一方で飼料消費がその後も増加した。1990年代半ばからアルコールやコーンスターチ等の工業原料に利用された。スターチは食品、ブドウ糖などの糖類、ビール、医薬、製紙等の幅広い分野の重要な原料となっているため、経済成長とともにその需要が拡大している。さらに、21世紀からは燃料エタノール原料としての利用が加わった。農林中金総合研究所のレポート⁴⁾によると、2006年からの中国の生鮮豚肉価格の高騰は、スターチ等の工業需要の拡大に加えて、エタノール向けのトウモロコシ需要の拡大による飼料価格の上昇が主因だと指摘されている。2006年末に農産物価格の高騰を懸念した当局は、穀物からのエタノール生産の拡大にストップをかけた。中国の1人当たりのスターチ消費量は先進国に比べてなお低水準にあることから需要の伸び代は大きく、中国はトウモロコシの輸入国に転じた。

2014年のトウモロコシの産地をみると、黒竜江・吉林・遼寧3省と内モンゴル自治区(以下では省・自治区・市を略して表記する)で春播きのトウモロコシが全体の44%、山東・河南・河北・山西・陝西・甘肅など夏播きの華北で30%を占める。その他、四川・重慶・雲南・貴州の高地の西南地区でも10%を占める。2004年からの10年間で黒竜江省が第7位から3.6倍で第1位に、内モンゴルが2.3倍、吉林省が1.5倍に急増するなど、産地の北上が顕著である。

3. 米—伝統的なインディカ米からジャポニカ米へ

古典的な農業地理では秦嶺山脈と淮河を結ぶラインが小麦生産地と米生産地との境界線として教えられてきた。現在でも日本の地図帳や教科書にはこの秦嶺—淮河線が描かれている。米の生産は湖南・江西・江蘇・湖北・四川という上位5省で全国の51%を占めるにすぎない。表1によると従来の説の秦嶺—淮河線はほぼあてはまるが、東北地区とりわけ黒竜江省の米の増産が著しいことが知られる。黒竜江省の米の生産量は1980年に80万tにすぎないが、1990年には314万t、2004年の全国第7位から2014年には湖南省に次ぐ第2位まで増産された。

米は元来高温多湿の気候に適する栽培植物であるから、

表 1. 中国の省区別（北京・天津・香港・澳門をのぞく）の気候と3大穀物の生産量

行政区	1月気温 (°C)	7月気温 (°C)	年降水量 (mm)	米 (万 t)		小麦 (万 t)		玉蜀黍 (万 t)	
				2004年	2014年	2004年	2014年	2004年	2014年
黒竜江省	-18.6	22.8	525	1,130	2,251	83	47	940	3,343
吉林省	-14.8	23.2	580	438	588	3	0	1,810	2,734
遼寧省	-11.1	24.6	703	402	452	9	3	1,080	1,171
内蒙古自治区	-10.9	23.3	391	55	52	111	154	948	2,186
新疆維吾爾自治区	-12.0	23.8	305	39	76	353	641	362	641
寧夏回族自治区	-7.1	23.9	188	53	62	80	224	118	224
青海省	-6.2	18.1	372	—	—	37	19	1	19
西藏自治区	-0.8	16.3	431	1	1	26	24	2	2
甘肅省	-5.1	22.5	317	4	4	272	565	245	565
陝西省	0.3	26.9	565	87	91	410	540	407	540
山西省	-4.9	24.0	443	1	1	237	259	632	938
河北省	-2.9	26.8	500	47	54	1,053	1,430	1,158	1,671
山東省	-0.2	27.5	712	91	101	1,585	2,264	1,499	1,988
河南省	0.4	27.1	641	358	529	2,481	3,329	1,050	1,732
安徽省	2.8	28.0	1,029	1,292	1,395	790	1,394	321	466
江蘇省	2.8	28.2	1,100	1,673	1,912	668	1,160	217	239
浙江省	4.4	28.7	1,445	687	590	19	31	23	30
江西省	5.5	29.5	1,608	1,579	2,025	3	3	5	12
湖北省	4.0	29.0	1,351	1,502	1,730	176	422	179	294
湖南省	4.9	29.7	1,450	2,286	2,634	15	10	127	189
四川省	5.7	25.3	883	1,520	1,527	416	423	557	752
重慶市	7.8	31.0	1,104	510	503	78	27	288	256
貴州省	5.5	24.4	1,116	477	403	77	62	334	314
雲南省	8.9	20.2	980	639	666	122	84	426	743
福建省	11.2	29.4	1,389	546	497	1	1	17	20
広西壯族自治区	12.8	28.4	1,284	1,123	1,166	2	0	176	266
広東省	14.0	29.0	1,780	1,123	1,092	2	0	56	77
海南省	18.0	28.8	1,706	147	155	—	—	5	—
計	—	—	—	17,875	20,651	9,195	12,621	13,012	21,565
台湾	16.3	29.7	2,535	134	159	—	—	17	—

資料：中国統計年鑑 2005、2015 ほか 気温・降水量は省都、— はデータなし

東北地区とりわけ黒竜江省は冷害のリスクに晒される。近代日本の東北日本で実施された耐寒性向上のための品種改良が中国の東北地区でも実施されたが、耐寒性の向上だけでなく、良食味米や耐病性向上も行われた⁵⁾。つまり、主産地の長江流域のようなインディカ米（籼米）ではなく、日本や朝鮮半島と同じジャポニカ米（粳米）が生産される。

長江流域の数千年前の稲作遺跡で得られたデータ分析では、ジャポニカ米が生産されたという。後氷期の温暖化により、インディカ米の生産に転換したというのが定説である⁶⁾。もっとも、長江流域にインディカ米の主産地となるのは「江折実らば天下足る」といわれた11世紀の宋代からとされる。

黒竜江省における米の主産地はウスリー川以西、黒竜江以南の松花江流域下流域の三江（サンチアン）平原と、吉林省に接する松花（ソンホア）江の上流域の松嫩（ソンノン）平原であるが、1983年以降の国営農場における家族生産請負制の導入によって米の増産がすすめられてきた⁷⁾。この2つの広大な平原はグレートプレーンズやウクライナ・南シベリアと並んで世界3大黒土地帯といわれる。

黒竜江省の面積は45.4万km²であり、山地が多い日本の総面積を超える。同様の気候条件をもつ北海道の石狩平野も日本では広いほうであるが、北海道の米生産量は63万tにすぎない。黒竜江省だけでも日本の米生産量の2倍以上、東北地区で3倍の生産量をもつので、華北以南の人々

のジャポニカ米の需要を満たすことになる。

青柳 (2012) はジャポニカ米の市場拡大の分析のために、2009 年の「中国農村住戸調査年鑑」によって米消費地域(ただし、農村部)を米主食圏・準米主食圏として定義している。米主食圏とは食糧消費に占める米の割合が 80% 以上、準米主食圏が 50% を示す省・自治区・市である。対して小麦主食圏は食糧消費に占める割合が 70% 以上、準小麦主食圏とは 50% 以上、小麦・米ともに 50% 未満を混食圏としている⁸⁾。

米主食圏はほぼ長江以南であるが、準米主食圏には小麦の二毛作地帯の安徽・江蘇、内陸の四川・雲南・貴州のほか、2009 年には吉林・遼寧が準米主食圏となった。黒竜江省は混食圏に分類されるが、米の消費割合は 48% まで増加している。混食圏に分類される北京は米の割合が 38%、準小麦主食圏の天津も 35% まで増加している。

青柳はこの統計分析にもとづいて、東北 3 省や臨海地域の都市部におけるジャポニカ米の消費の拡大を検証するため、黒竜江省ハルビン⁹⁾、小麦食圏の石家荘、青島、済南、西安、銀川、蘭州の住民にアンケート調査を実施している¹⁰⁾。また、インディカ米生産地の都市部でも東北米志向について調査を実施し¹¹⁾、さらに浙江省におけるジャポニカ米の生産の動向についても検討している¹²⁾。

4. 小麦—伝統的な食糧から飼料作物へ

小麦の生産は河南・山東・河北・安徽・江蘇の上位 5 省で全国の 76% を占め、華北平原に集中している。華北平原の南部の安徽・江蘇は二毛作が行われている。夏作物の米の裏作として冬小麦(秋播き小麦)が栽培される。

21 世紀以降の WTO 加盟による自由化で小麦価格が下落して生産量は一時減少したが、2004 年以降の生産補助金交付によって小麦の生産量は増加を続け、2004-2014 年における、小麦の増加率は 37% に及ぶ。米の増加率の 16% を大きく上回っている。上位 5 省の冬小麦地帯だけでなく、春小麦地帯でも生産量が増加している。

中国小麦生産地の主食は麺あるいは蒸しパンのような万頭(マントウ)やその中に餡や具が入った包子(パオズ)である。小麦の増産にもかかわらず、小麦の食糧としての消費量は減少してきた。食糧としての小麦の消費を補う重要なエネルギー源として北方米の増産があることは容易に理解される。

ところが、前述のトウモロコシの工業用需要の増加に伴って、2008 年頃から小麦の飼料としての需要が増加し

はじめた¹³⁾。小麦の増産と食糧消費の減少にもかかわらず、中国が小麦を輸入しなければならないのは、飼料需要の変化である。

河原昌一郎のレポート(2014)¹⁴⁾によると、中国の小麦の国内消費は 2004/05 年には 87% が製粉用であったが、2011/2012 年に 67% が製粉用であるものの、飼料用が 20%、工業原料が 9% に増加している。

5. 綿花—産地の変化

綿花の生産は 2004 年の 632 万 t から 2014 年の 618 万 t と増えていない。同じ期間に輸入は 110 万 t から 513 万 t に急増していることから、国内需要は増え続けていると思われる。同じく中国統計年鑑で綿糸の生産量をみると、2004 年の 850 万 t から 2014 年の 3,645 万 t に急増している。生産量の世界シェアも 48% から 72% まで伸びている。「世界の工場」たる中国は、鉄鋼と同様に繊維産業でも資源を海外に依存している。

綿花の生産地は、新疆ウイグル自治区が 2004 年の 178 万 t (全国の 28%) から 368 万 t (60%) へ急増した代わりに、山東・河南・河北・江蘇・安徽・湖北・湖南の華北から華中にかけての生産地が減少している。2000 年以降の西部大開発の目玉の 1 つが、華北平原の綿花の生産地を移転することであったことが要因であろう。

新疆ウイグル自治区は乾燥地域であるから、綿花栽培には天山(テンシャン)山脈や昆崙(クンルン)山脈の雪解け水が使用される。開花期・成熟期における温暖少雨はむしろ綿花の栽培に適する。中央アジアのアム川・シル川の灌漑による綿花栽培に類似している。そもそも新疆の綿花生産は、1954 年の新疆生産建設兵団の設置に始まった¹⁵⁾。ウイグル族が 46% に対して漢民族が 41% を占めることは兵団による屯田兵開墾の歴史を物語っている。

新疆は北部のジュンガル盆地、南部のタリム盆地、東部のトルファン盆地からなる。新疆綿はエジプトのギザ綿、アメリカのスーピマ綿と並ぶ世界 3 大高級綿といわれる。北部は繊維の長い超長綿だけでなく大陸綿(汎用綿)も生産され、南部は超長綿が主力であるため、新疆の綿花生産量の大半を北部が占めている¹⁶⁾。漢民族の比率は北部が 62%、南部が 18% と大きく異なることは、綿花栽培のあり方に関係するのかもしれない。

6. 茶—消費の増大

FAO の 2002 年の統計では、日本人は 1 人当たり茶の消

表2. 中国の省区別（北京・天津・香港・澳門をのぞく）の綿花・茶・水産物

行政区	綿花（千t）		茶（千t）		豚（万頭）		水産物（万t）	
	2004年	2014年	2004年	2014年	2004年	2014年	2004年	2014年
黒竜江省	—	—	—	—	1,217	1,360	43	51
吉林省	—	1	—	—	568	1,000	12	19
遼寧省	5	0	—	—	1,365	1,559	403	526
内蒙古自治区	7	2	—	—	711	669	8	15
新疆維吾爾自治区	1,780	3,677	—	—	207	304	7	14
寧夏回族自治区	—	—	—	—	118	75	6	16
青海省	—	—	—	—	106	121	0	1
西藏自治区	—	—	—	0	26	40	0	0
甘肅省	110	64	—	1	641	620	2	1
陝西省	82	42	10	49	757	879	8	14
山西省	120	24	—	0	453	515	4	5
河北省	67	431	—	—	2,946	1,916	92	126
山東省	1,100	665	5	18	3,058	2,911	718	904
河南省	670	147	12	61	4,569	4,420	66	92
安徽省	410	263	56	111	1,969	1,585	171	224
江蘇省	50	160	11	15	1,911	1,800	366	519
浙江省	23	25	140	165	1,125	965	494	574
江西省	85	134	13	47	1,442	1,739	156	254
湖北省	40	360	76	250	2,190	2,551	302	433
湖南省	200	129	67	162	4,343	4,188	166	248
四川省	33	12	86	234	5,627	5,001	86	133
重慶市	—	—	16	34	1,720	1,484	23	44
貴州省	1	1	19	107	2,033	1,601	9	21
雲南省	—	—	95	335	2,606	2,679	22	58
福建省	—	0	160	372	1,242	1,149	591	696
広東省	—	—	40	74	1,989	2,130	665	836
広西チワン族自治区	1	3	22	59	2,671	2,360	269	332
海南省	—	—	16	1	370	413	136	197
計	6,324	6,178	814	2,096	47,290	46,583	4,753	6,462
台湾	—	—	21	15	678	—	149	—

資料：中国統計年鑑2005、2015ほか — はデータなし

費量は1,060gを消費しているが、茶の発祥地である中国は2002年に1人当たり年間390gと世界平均を下回っていた。これは文化大革命の影響で飲茶がブルジョアジーの享楽行為とされていたからだといわれる¹⁷⁾。もっとも文革以前の中国は農村社会であるから、茶の消費は一般的でなかったとすると、消費量が少ないのは当然かもしれない。国全体の消費量の世界シェアでも2002年には12%であったが、高度経済成長を遂げつつあったその頃から2010年には24%まで世界シェアを伸ばしている。

茶の生産は2004年の81.4万tから2014年の209.6万tへと10年間で急増しているが、輸出は同じ10年間に30万t前後であり変化がない。つまり国内消費が約2.5倍

以上になったと推定される。2014年の省別の生産地の上位は、福建37.2万t・雲南33.5万t・湖北25.0万t、四川23.4万t、浙江16.5万t、湖南16.2万t、安徽11.1万t、貴州10.7万tである。中国茶といえば、烏龍茶（青茶）のイメージが強いが、これは日本の飲料メーカーの宣伝の影響であろう。茶葉生産量の70%以上が緑茶で占められているという。烏龍茶は福建・広東と台湾が主産地である。輸出もされるので、烏龍茶の国内消費は決して多くない。

2004年からの変化という点では、雲南・四川・湖北・湖南など内陸部で急増している。雲南と言えば普洱（プーアル）茶、四川といえば紅茶（川紅）を連想するが、その実態は定かではない。また、安徽省の祁門（キームン）紅

茶はインドのダージリンやスリランカのウバとともに世界3大紅茶と称される。街に茶館が急増する様子から、紅茶などの需要は急増していることは理解される。

なお、飲茶の慣習からか中国ではコーヒーは日常的でなかった。2013年のFAOの統計でコーヒー豆の輸出量でベトナムがブラジルを抜いて世界一になった。中国のコーヒー豆の輸入量は多くないが、すでに若年層を中心にコーヒーの需要が増えているといわれる。普洱茶で知られる雲南省はコーヒー豆の一大産地になりつつあるという。

7. 水産物—普遍的なたんぱく源へ

中国の水産物の消費はかつて淡水魚がほとんどであった。四方を海で囲まれた日本の水産物との大きな違いである。東シナ海に面する山東・江蘇・浙江、南シナ海に面する広東・福建・広西・海南、渤海に面する遼寧・河北といった、外洋に面する地域は100万tを超えるが、淡水湖を含む長江流域の安徽・江西・湖北・湖南・四川の各省も100万tを超えている。生産量は臨海部だけではなく、長江流域や淮河流域の内陸部でも増加している。

大島一二(2016)¹⁸⁾によると、中国の水産物の急増は養殖業による増加が主要な要因である。海面養殖が2000年の926万tから2013年の1,739万tに、内水面養殖が1,309万tから2,802万tに増加している。主要な淡水養殖の業種は中国の四大家魚(養魚)といわれる草魚・白鯪・黒鯪・青魚のほか鯉・鮒などである。養魚は中国の伝統的な養殖法で、養蚕や稲作などと兼ね合わせて営まれてきた。

なお、鰻については全体に占めるシェアは1%前後(21万トン)にすぎないが、日本向けとして知られている。日本国産鰻は2万トンにすぎないので、中国産の鰻のシェアが大きいことが知られる。

一方、最近では海産物の需要の増大によってその漁獲量が急増したというイメージがあるが、2000年前後から海面漁業の漁獲量は1,300～1,400万tではほぼ変化していない。沿岸漁業における乱獲と環境破壊による水産資源の減少がその要因である¹⁹⁾。近年公海への中国漁船の進出が指摘されているのは、こうした水産資源の減少を補うものである。日本の排他的経済水域に接する三陸沖でのサバやサンマの乱獲が報道されている。

8. 豚—伝統的な食材の自給危機

中国における肉の生産のうち、豚肉は群を抜いている。2013年に豚肉が5,273万tで、世界シェアでも47%を占

める。一方、鶏肉1,279万t(世界全体の13%)、牛肉639万t(同10%)、羊肉208万t(同37.2%)にすぎない。本稿が動物性たんぱく源の代表として豚を選ぶ所以である。

表2のように、最近10年間の豚の飼養頭数はほぼ横ばいである。世界の食肉増加の主力とみられてきた中国の消費量が増加していないことは、上述の水産物の増加に加えて、都市部を中心とする食生活の「現代化」も影響していると推測される。ところが、2015年以降政府の環境規制の強化を背景にして、小規模な養豚業が廃業に追い込まれ、豚の頭数は4億頭を下回った。そのため豚肉をドイツ・スペイン・アメリカ・デンマークなどから輸入しているが、この傾向は続くといわれる²⁰⁾。

羊が飼養される乾燥地域の各自治区などをのぞいて、豚は中国全土で飼養されている。伝統的な中国八大料理(八大菜系)²¹⁾でも、必ず食材の中に含まれるが、沿岸部と内陸部で生産量はやや異なるかもしれない。

そこで、人口100人当たりの豚の飼養頭数を算出してみると、全国平均が34頭であるが、湖南・四川が60頭以上、雲南が50～60頭、河南・湖北・広西・貴州が40～50頭と、北西部の乾燥地域以外で多くなっている。江西と東北3省も全国平均を上回っている。浙江・広東が20頭未満、安徽・江蘇・山東が20～30頭と少ないことは、水産物がたんぱく源を補っていると考えられる。海南省は46頭と漁業だけでなく、豚の飼養もさかんである。北西部の山西・寧夏・新疆・西藏は15頭未満、陝西・甘粛・青海が20～25頭を示している。

9. おわりに

本稿は21世紀以降の中国の農水産物の生産と消費の動向について、その地域性を含めて、「中国統計年鑑」などを用いて分析した。

とうもろこし生産の急増は中国の工業化の進展を示す指標であり、もはや食用や飼料用ではなく、スターチやエタノール燃料のような重要な工業原料として生産されている。北中国の代表的な食糧としての小麦の生産量は減少したが、飼料作物として増加している。米の生産量、とくに東北3省におけるジャポニカ米の生産量が増加している。ジャポニカ米は臨海部でも生産されはじめ、都市部を中心に急速に普及しつつある。

中国経済の成長につれて綿製品の需要は増加したが、その原料である綿花の生産量は増加しておらず、外国から輸

入している。西部大開発によって生産地域は華北平原から新疆ウイグル自治区に移動した。茶は中国の伝統的な商品作物であるとみなされたが、20世紀まで茶の生産量は世界水準ではけっして多くなく、近年急速に増加している。中国人の富裕化を象徴しているといわれる。

豚は中国の最も一般的な食材であり、養豚はほとんどの湿潤地域でおこなわれている。経済成長に伴う食生活の現代化などによって、その生産量は増加していない。一方、水産物は急速に増加している。海岸沿いの漁獲量は乱獲や環境破壊による資源の枯渇によって増加していないが、海岸部の養殖だけでなく、長江流域や淮河流域の淡水魚の養殖が急増している。

世界の工場となった中国の工業はすでに海外の資源に依存していることは周知のとおりである。本稿で対象とした綿花は国内生産量の数%を輸入に依存してきた。工業原料となりつつあるトウモロコシも恒常的な輸入に転じつつある。

しかし、食糧自給については、中国は改革開放以後も堅持し続けてきた。1996年の中国政府の「食糧白書」は食糧自給率が95%以上を維持することを宣言した。東北3省などによるジャポニカ米の増産はその政策を支えてきたといえる。

ところが、近年その食糧自給の原則は崩れつつある。本稿では対象としなかったが、大豆が代表的な例である。現在自給率は15%に満たないが、2003年に輸入量が国内生産量を上回った。本稿で対象とした豚肉の輸入は食糧自給の政策転換の象徴である。

注記および参考文献

- 1) 滋賀大学教育学部の「地誌学」という中学校社会科および高校地歴科免許のための科目。
- 2) 北京とその北西に位置する承德（世界遺産に登録された清代の避暑山荘がある）、山東省青島、江蘇省蘇州や台北のほか、黒竜江省、陝西省の西安と榆林（内モンゴルに近い）、河南省洛陽、重慶、広西自治区。
- 3) 張馨元（2014）『中国トウモロコシ産業の展開過程』勁草書房
- 4) 阮蔚（2007）「中国におけるトウモロコシの需要変化－エタノール等工業需要の急増により加速する輸入国化－」農林金融 2007年9月号、15-30頁
- 5) 李海訓（2014）「黒竜江省稲作の拡大要因と1980年代以降の展開」、社会科学研究 66-1、17-43頁
- 6) 佐藤洋一郎（2008）『イネの歴史』、京都大学学術出版会、70-105頁
- 7) 加古敏之・張建平・草苺仁（2001）「黒竜江省農墾区における稲作の発展要因」中国経済研究 1-1、2-15頁
- 8) 青柳齊（2012）「米消費量の変動要因と地域間格差」、青柳齊編著『中国コメ産業の構造と変化－ジャポニカ米市場の拡大－』（昭和堂）所収、34-51頁
- 9) 青柳齊（2012）「混食圏でのコメ消費の普及過程－黒竜江省ハルビン市の場合－」、前掲書所収、52-65頁
- 10) 青柳齊「小麦食圏における都市住民の米食志向」、前掲書所収、66-87頁
- 11) 青柳齊「インディカ米産地における都市住民の東北米志向」、前掲書所収、88-109頁
- 12) 青柳齊「浙江省におけるジャポニカ米の生産の拡大と背景」、前掲書所収、145-169頁
- 13) 前掲注4)
- 14) 河原昌一郎（2014）「中国の小麦需給の動向」農林水産研究所レビュー（Primaff Review）、No.59、6-7頁
- 15) 御法川絃一（2007）「中国の繊維力－内側から見た繊維事情－（その3）新疆と綿花」繊維トレンド（東レ経営研究所）、2007年3・4月号、25-33頁
- 16) 前掲注15)
- 17) 王静（2013）「現代中国における「茶文化」の出現と創造－1980年代を中心に－」都市文化研究 15、28-39頁
- 18) 大島一二（2016）「中国における水産業の発展と課題－資源減少と食品安全の問題－」桃山学院大学総合研究所紀要 42-1、15-23頁
- 19) 前掲注18) 20-21頁
- 20) 伊澤昌栄・伊佐雅裕（2016）「最近の中国の豚肉需給動向」畜産の情報 2016年6月号、農畜産業振興機構HP
- 21) 山東料理・江蘇料理・浙江料理・安徽料理・福建料理・広東料理・湖南料理、四川料理

